

海外メンタルヘルスの現場から II

(9) シンガポールを離れる患者さん

シンガポール日本人会クリニック

医師 日暮 真由美

3~4月は日本人駐在員の大移動の季節。日本へ本帰国される方、他国へ転勤移動される方など、シンガポールを離れる方がたくさんいらっしゃいます。クリニックの方もそんな関係で少し忙しくなります。転勤先の医療機関探し、患者さんに持って行って頂く紹介状書きもこの季節の大仕事です。診察室の棚に、まだ紹介先探しや紹介状書きをしていないカルテが、ただいま現在進行形でどんどん積み上がっていています。

転居先の医療機関探しの他、お子さんの場合は福祉関係施設や療育機関、民間のカウンセリング施設などへの紹介要望が多く、また当然そうすべきと私も考えています。しかし、患者さんは、そういった日本や外国の機関がぱっとわかるなにかしらのコネがこちらにあると思われている方も多いようです。確かに何らかのネットワークでただ機関をさがすだけなら可能ではあるのですが、患者さんが一番要望している部分、つまりそこが「評判の良い所」なのかどうかまでの情報を得るのは実際難しいものがあります。

私の出身大学やその後の勤務先は関東だったため、関東圏ならば既知の知識や知人、友人を頼って情報を収集できることもあります。それ以外の地域の場合は学会の名簿、インターネット、公的機関（医療・保健・福祉・療育・教育機関）へ直接問い合わせを行うこととなります。転勤先が海外であるときはもちろん、日本の場合でも当然日本全国にわたるので大変です。これらの問い合わせは患者さん自身でもできることではありますが、一方、私が医療機関の者として問い合わせるほうが効率よく病態を伝えることができ、先方の対応やもらえる情報に違いが出ることも感じています。しかし、大きな病院や公的センター系の施設ではなく、民間のクリニックやカウンセリング施設に関するものだと、実際の評判、口コミレベルの情報収集はきびしくなります。医師や心理士の経歴や学会資格、論文タイトル、つてのつてを頼ってその地域に詳しい知人からの情報提供などで、ただもう推測するしかないことも多くなります。

いずれにしてもこれらはかなり時間のかかる作業になります。当院のような小さなクリニックではのぞむべくもないのですが、やはりこの仕事はその道専門のケースマネージャーさんがいてくれたらなあといつも夢見ています。

今年も当院に長年通院してくださっていた何人かの方が日本へ本帰国され

ます。紹介状を書くために、まず、百科事典よりも厚くなったカルテを最初から見直し、症状の歴史を整理する作業をします。通院期間が短い方は見直しはそれほど大変ではありませんが、短い方でも長い方でも、紹介状を書くのにはとても神経を使います。

どんな風に紹介状を書くのかは医師によってかなり違いますが、私はどちらかというと割と長めにこれまでの経過を色々書きたい方です。病気自体が何かの検査数値の上がり下がりで表せるものではないので、どんなことがあってどんな様子だったかを表すのにどうしても言葉が多くなってしまいます。また、日本の心療内科、精神科外来は他科と同様、医師は大変多忙です。たった数分間の診察時間内に、患者さんがシンガポールでのできごとや辛かったことの経過を全部話したり、医師に十分理解してもらうのはまず困難です。だから、患者さん、担当医師双方のためにも、紹介状が詳しいほうが少しでも役立つに違いないと考えています。外来の忙しい日本ではあっさりとした簡潔明瞭な紹介状を書かれる医師の方が多いとは思われるので、きっと私の紹介状は読む側にとっては暑苦しい印象かもしれません。でも、シンガポールではこの患者さんはどういふことでこんな状態だったんですよ、とどうしても伝えたくて、つい書きこんでしまいます。

紹介状持参で帰国されてからも、またしばらくたってから、別の所を紹介してもらえないか？紹介状をまた送ってもらえないか？という依頼が時々あります。最初の紹介先、あるいは自分や家族が見つけた医療機関がどうも合わなくて通院先を変えたい、という理由です。もちろん対応させていただくとともに、久しぶりにその患者さんがどういう様子で過ごしているか知ることのできる、私にとっても重要な機会になります。